

審査の結果の要旨

氏名 遠藤 野ゆり

本論文は、或る小舎制自立援助ホームにおける、養育者と思春期の子どもたちとの関わり合いを、サルトルの意識論に基づき、事例に即して明らかにしている。被虐待や非行体験を抱える子どもたちについての研究の必要性は、近年特に強調されるが、これまではほとんどなされてこなかった、養育者と寝食を共にしている養育実践場面での長期に亘る本事例研究は、極めて独創的であり、子どもの意識に即した、質の高い労作となっている。

第Ⅰ部では、第Ⅱ部以降の事例研究を基礎づけるべく、意識に関する先行研究の不十分さが指摘されると同時に、サルトル研究における従来の解釈とは異なり、具体的な人間の意識の解明という観点から、『存在と無』について筆者独自の捉え直しと解釈がなされる。

第Ⅱ部では、「それがあらぬところのもので在り、それがあるところのもので在らぬ」という在り方で、己自身に対峙している意識は、自己とのこうした差異を乗り越えようとする動態の中にあることが描き出される。この動態こそ、現在、過去、未来という時間経験を基礎づけるがゆえに、対自としての意識は、時間の形式においてしか捉えられない、というサルトルの解明に基づき、第四章「現在において自己から脱自する意識」、第五章「過去を自己の事実性とする意識」、第六章「未来へと自己を超出する意識」という観点に沿って、自己に向き合わされる時の子どもの意識の在り方とその変化が克明に解明される。

第Ⅲ部では、『存在と無』における対他論の観点から、第七章「対象・他者との出会い」、第八章「『人』への埋没」、第九章「主観・他者からの超越」、第十章「対象・我々への変様」といった他者経験に定位し、過酷な過去をもつ子どもが辛さを味わいながら、自己を乗り越え豊かに変様し、社会人として自立に到る過程が、辛さの克服として明らかにされる。

第Ⅳ部では、『真理と実存』、『文学とは何か』、『倫理学ノート』に基づき、養育者が子どもたちをいかに支え、「リスク」を覚悟しつつ、何を己の責任として引き受けているかが、サルトルにおける「贈与」としての真理開示や「ジェネロジテ」の観点から、考察される。

対自としての意識の在り方に徹底して定位する本論文は、時にはサルトルの不十分さを克服するまでに到りながらも、一貫してサルトル哲学との緊張を保持している。このことにより、個々の事例における養育者との対話の流れに即した子どもの意識の微妙な変化と、長期に亘る子どもの変化が丁寧に記述され、深い次元で豊かに解明されている。特に、子ども自身が被虐待や非行経験といった辛い過去を養育者と共に乗り越えていく過程の記述と解明は他に類をみない。過去においてだけでなく、現在においても辛い経験を抱えた思春期の子どもが、養育者によって、また自己自身によって作用を及ぼされ続けながら、その在り方を変えていく様子を克明に解明した本論文は、日常的な関わりだけでなく、子どもが辛さを味わう関わり、子ども自身にとっての意味を明らかにし、被虐待や非行経験を抱える子どもたちに対する支援や養育の具体的な在り方を示唆している。以上のことから、本論文は、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。